

「形式的操作を超えて」には、奇妙にも介入ということが欠如している。

当然ながらこの立場は、教育の分野を真空状態におく。この真空状態は、現在のところ、「一般的思考技能」（概観としては、Nickerson, Perkins & Smith, 1985を参照）を教える多数のプログラムによって満たされている。「一般的」という有望な用語は、第三の道具の一種をほのめかしている。しかしながら、こうした動向における支配的な傾向では、創造的・批判的思考が個別の技能として分断されている。これらの技能のあるものはさらにいくつかのステップに分析される。そのうえでこのようなステップバイステップの手続きが、個別のコースで、あるいはさまざまな学校教科のなかに埋め込まれて、教えられていく。典型的な「一般的思考技能」は、以下の三つの例のうちのいずれかのようであろう。

例1

1 再焦点化の段階 — 2 意識化の段階 — 3 応答の段階 — 4 目標設定の段階 — 5 課題
従事の段階 — 6 課題完了の段階 (Marzano & Arredondo, 1986, p. 21)

例2

規則1 分析の目的を同定し、それを述べよ。 — 規則2 分析を導く手がかりあるいは問いを同定せよ。 — ステップ1 「全体」を部分に分けよ。 — ステップ2 ひとつの部分を手がかりあるいは問いと比較せよ。発見したことを記録せよ（リストを作成せよ）。このステップをステップ1で同

定したすべての部分について繰り返せ。→ステップ3 結論を引き出し、規則1で述べられた目標を果たすための一般化を行え。(Jackson, 1986, p. 35)

例3

1 状況を定義せよ。→2 目標を述べよ。→3 アイデアを生み出せ。→4 新しい状況を定義せよ。→5 プランを用意せよ。→6 行為せよ。(Wales, Nardi & Stager, 1986, p. 40)

これら「一般的思考技能」は、実際はよく私たちの行うある種の行為、私たちの文化が「問題解決」、「分析」、「意思決定」などと呼びならわしている行為を遂行するアルゴリズムあるいは発見的規則である。ピアジェの入念な形式的諸操作構造と比べて、これら個別化された「思考技能」は特殊で恣意的である。間違はなくそれらは、拡張的移行の全体的習得とは関係がない。生活活動の観点からするならば、「一般的」という用語はここではねじ曲げられている。まるで生活はジグソーパズルのような断片の集まりで、それら断片を偶然的に「まとめた」ものであるかのように見なされている。それは、生活というものがしばしばどのように見えるか、ということでもある。人生の偶然性それ自身、分業という疎外の主観的帰結を正しく反映しているのである。

9 候補としての形式的弁証法

ポスト形式的操作への関心が現在のように高まる前に、クラウス・リーゲルは、認知発達の「第五の段階」を提唱し、それは「弁証法的操作」であるとした (Riegel, 1973)。リーゲルの弁証法概念は、彼の「弁証法的心理学の基礎」(1979) に要約されている。その試みと並んで、社会学者イアン・ミトロフと同僚たちは、彼らのいう「弁証法的探究システム」の研究プログラムを開始した (概観としては、Mitroff & Mason, 1981 を参照)。これらは異なる学問を背景にはいるが、ともにその認識論的・心理学的概念において本質的に同じである。これらの線上でなされたもつとも実証的な研究は、今までのところ、マイケル・ベセツシの「弁証法的思考と成人発達」(Bassettes, 1984) である。

リーゲルは、弁証法的思考を次のように特徴づけている。

いかなる事象も、それ自体であると同時に他の多くの事象でもある。たとえば、いかなる具体的な対象——たとえば椅子——であれ、それ自身であるだけでなく同時に多くの異なった特性を有する。あることを選び他を無視することによって、私たちは椅子に関する何がしかの抽象概念 (理論) を発達させるだろう。しかし、それら特性のすべてをその相補的な依存状態において見るときにのみ、私たちは適

切で具体的な理解に達するのである。(…)弁証法的思考(理性)は、世界を、それぞれの具体的な対象を、多くの矛盾する諸関係のなかで理解する。(Riegel, 1979, p. 39)

リーゲルは次にヘーゲル(Hegel, 1966)の有名な議論、「主人と奴隷」をとりあげている。彼は、主人であれ奴隷であれ、もし一方を他方から切り離して考察するならば、それは抽象的で非弁証法的であると指摘する。

そうした相互関係の両者を記述することのみが、どちらか一方を包み隠すことなく全体性の具体的表象をもたらすのである。そうした記述は、矛盾を内在する弁証法的思考をよく表している。(Riegel, 1979, p. 39)

なるほどもつともに響く。しかしながら、よく見ると、明らかに重要な問題がある。まずリーゲルは、彼のいうシステムを二項からなる形成体へと還元してしまっている。母親と子どもの二者関係や著者と読者の二者関係を例に引くのが彼のお気に入りである。

ここでの分析は、答えることだけでなく問うことまでも追求するものなのであり、最小限、二つの個体(たとえば、母と子)を含むことが必要条件である。両者は、継続的に相互に作用し合い、共に成長・発達していく。(Riegel, 1979, p. 1)

子どもにとっての負担、そして読者にとっての負担は、重すぎもなく、軽すぎもなくあるべきである。情報は、適切な時期に、適切な量だけ、適切な種類のものが与えられねばならない。(…)二つの時間的継起が協調し同調化するというトピックこそ、(…)弁証法理論のもっとも中心的な問題なのである。

(Riegel, 1979, p. 8)

ここには、拡張的で媒介的な第三の状態 (thirdness) はない (第2章でのパスとポパーに関する私の議論を思い出してほしい)。新しい文脈を創造する代わりに、所与の文脈内での同調化が、弁証法を中心課題になっている。

リーゲルの弁証法においては、人間の相互作用システムの歴史的に形成される対象や道具に、ほとんど注意が払われていない。弁証法は関係と相互作用の非歴史的な分析となる。

しかし、これら孤立した諸関係、抽象的な相互作用を、全体として、人間世界の関係性の全体性として提示することによって、「弁証法的心理学者」は関係性を具体化するのである。彼らは、心理学をシステムの思考に置き換えるのだ。(…)人間は、モノと同様、交換可能な運搬装置となる。つまり、諸関係のシステムにとっての、ただの素材となる。(Gruher, 1979, p. 162)

リーゲルの弁証法は、流通と交換の観点からのみ、文化・歴史的な社会的諸関係を反映している。ブルジョア社会における流通と交換の範囲内で、人々とモノは、それらの抽象的な諸関係において現

れ、交換価値という不可視の実体によって媒介され統制される。いかなる新しい価値も産出されず、いかなるモノとしての実体も生じず形を与えられないように思われる。その症状は、リーゲルの弁証法が自然の弁証法を知らず、人間労働の対象のなかに埋め込まれた弁証法を知らないということである。チャールズ・トールマンは、それを「関係の形而上学」と呼んでいる (Tolman, 1981)。

イアン・ミトロフと協力者たちは、少し異なる見解をとっている。彼らにとつての弁証法とは、競合し合うポジションや解釈を明らかにし、それに挑戦し、そして統合するための手続きである。ミトロフとキルマン (Mitroff & Kilmann, 1978, p. 73) は、こう述べている。「この手続きの目的は、(…) 暗黙の前提を明示的なものにし、それを、対立する観点からの対抗的な前提と対置することである」。研究のひとつの結論は、次のようなものである。

ここでのメッセージは、複雑な問題に対して、競合する専門家たちの複数のストーリーを聞くのがよいということを主体に教えることができる、ということである。専門家たちのポジションの基礎となつている前提をより良く理解する助けになる、というだけの理由でも。(Mitroff & Mason, 1981, p. 36)

ここでは、弁証法が言説やディベートの形式に還元され、言説の対象を歴史的に分析することからはまったく切り離されている。そこで課題とされているのは、競合し合う見方を理解し統合することであつて、文化・歴史的な社会的現実のシステムがもつ対象のダイナミクスや拡張的な矛盾は、実践的に把握されていないし活用されていない。

ベセッシの本 (Basseches, 1984) は、こうした形式的弁証法の領域の探索の仕上げともいえる。彼は、大学生と教授たちへのインタビュー記録から、「弁証法的スキーマ」を同定しようと試み、それを四つのグループにまとめている。すなわち、「運動志向的スキーマ」、「形式志向的スキーマ」、「関係性志向的スキーマ」、「メタ形式的スキーマ」である。しかし、彼は、インタビューで扱われているトピックの内容と歴史（そのトピックはいかなる場合でも大学教育という性質を備えている！）をまともにとりあげていない。それゆえ、主体の示す思考の形式と観念は、それらトピックとはまったく独立に作られた「弁証法」である。まったくの無知にもとづく概念も誤解にもとづくそれも、「運動志向的スキーマ」とか「関係性志向的スキーマ」だとされる。主体は、研究者を喜ばせるか、あるいはみずから楽しむために、「弁証法的」なごまかしを産出する特別の技能をたくみに発達させることができた。

本の最後でベセッシは、このことをほぼ認めている。

哲学的な見方からすれば、この本がおそらくもつとも議論を呼ぶであろう点は、弁証法的思考が相対的に形式主義的で、内容から自由なものとして叙述されている、という事実だろう。(…) 弁証法的思考を形式主義的に叙述するという企ては、潜在的には有効であるけれども、必ず限界があり、曲解の可能性がある。(Basseches, 1984, pp. 366-367)

現在の形式的弁証法の波は、実際新しいものではない。クロード・レヴィ・ストロースは、ソルボ

ンヌ〔旧パリ大学文学部・理学部、現在のパリ第四大学〕の学生だった頃を回想しながら、この形式の思考について辛辣に述べている。

当時私は、どのような問題でも、重要なものも瑣末なものも、いかに解決されうるかを学び始めていた。方法は決して変わらない。まず、伝統的な、問いへの「二つの見方」を立てる。それから、一方に対する常識的な正当化を提出し、それが間違っていることを他方によって証明する。最後に、第三の解法を用いて両者をまとめあげ、他の二つは共に不十分なことが示されるのである。ある言語的な術策によってそれが可能になる。つまり、単一の現実の相補的な側面として伝統的な「アンチテーゼ」を並べ立てることである(…)。ほどなく、その練習はたんなる言語化にすぎないものとなり、内省は一種の高質な洒落に道を譲る。(Levi-Strauss, 1961, pp. 54-55)

ここにおいて、一種の「第三の状態」がえられる。しかしそれは「まとめあげる」類いの第三の状態であって、拡張的なものではない。

10 実体の弁証法

形式的弁証法の提案者たちは、科学的弁証法の創設者としてのヘーゲルに当然のごとく言及する。

しかしながら彼らの解釈は、ヘーゲルの思考の質を正しく評価していない。ヘーゲルの本質を把握することは、実体的で内容と結びついた弁証法にとって必須の前提条件である。

よく知られているように、理性、思考とはヘーゲルにとって、それを通して、そしてそれにおいて、あらゆる現実の存在が見いだされる、第一の原動力であり無限の力であった。しかし、理性あるいは思考は、個人の頭のなかで生じ、言葉においてのみ明らかになるような、純粹に心的な何かなのではない。ヘーゲルが要求しているのは、思考をそれが現実化するあらゆる形式において、とりわけ人間の行為と活動において、そして個人の頭の外側でのモノと出来事の創造において、研究すべきだということである。

こうした基礎に立つて、ヘーゲルは、個人意識の論理形式を正しく見ていた。それは、個人のこちらの外側にあるモノによって、個人を取り巻き、揺りかご以来相互作用してきた人々によって集団的に創造され伝達されてきた、精神的・物質的文化全体によって、客観的に決定される。この集団的過程、人間性の知的発達、科学や技術の歴史のなかに客観的な痕跡をとどめているだろう。ヘーゲルによれば、この過程は、ひとつの相として、対象的活動のなかで思考を現実化する活動や、意識の外側にあるモノや出来事の形式における思考活動を含む。ここでヘーゲルは、レーニン (Lenin, 1963, p. 278) が指摘したように、「唯物論にきわめて接近した」のである。

思考は、集団的で協働的な活動として研究されなければならなかった。そこでの個人は、部分的な働きのみ演じる。実際に共通の仕事へ参加するとき、個人は、彼らにそのような意識がないとしても、みずからを普遍的思考の法則や形式に従わせていく。

ヘーゲルにとつて弁証法は、まさに思考の形式であり方法であつた。それは、矛盾を解明すること、そして対象のより深いレベルにおける理解にもとづいて矛盾を具體的に解決することを共に含む過程だつた。言いかえれば、矛盾は、科学、産業、そしてヘーゲルが「客観精神」と呼んだすべての領域が発展していくなかでのみ、解決されうる。弁証法的思考の実践的成果は、個人的に調整されるのではなく、集団的で文化・歴史的に社会的な発展であり、物質的な人間文化の質的変化である。

ヘーゲルが形式的弁証法の提案者たちよりも本質的にまさっているのは、次の二点にある。(1)ヘーゲルは、普遍的形式におけるその始原、そして科学、技術、道徳といった人間文化の発展法則、これらの思考の論理形式の客観性、を指摘し擁護した。(2)ヘーゲルは、実践、すなわち、概念に従つてモノを思考と論理の観念に移し変えていく、感覚対象に対する活動過程を導入した。

しかし、論理や思考の普遍的な形式やパターンは、どこから来るのだろうか。普遍的精神はいかにして生じたのだろうか。

ヘーゲルの見方を理解するためには、彼が安易に宗教に答えを求めなかつたことに注目しなければならぬ。むしろ彼の着想は、自然発生的に発展していく社会的分業、とりわけ精神的な仕事が肉體労働から分離するという現実の諸条件を的確に反映したものだつた。これらの条件のもとでは、科学は特殊な専門職へと転換され、大衆、そして実践的な肉體労働の上位にあつて対立する。

ヘーゲルは、この条件を心に留めつつ、人間と現実の思考を、人間とその世界を實際に創造した永遠の力としての非個人的な、「絶対」思考と対置した。論理は、絶対的な形式となり、それとの関係において、物質世界と現実の人間活動は、何か派生的なもの、二次的に創造されたものとなつた。科

学者、精神的な仕事に携わる者は、普遍的思考の代表者として現れ、そのカテゴリーに接近し定式化する。肉体労働という感覚的な対象的活動は、思考の「前史」と「適用」としてのみ現れる。必然的に、言葉（あるいはことば遣い）が、思考の外化と客体化の第一のツールとして現れることになった。

エンゲルスによれば、弁証法とは、「自然、人間社会および思考の一般的な運動と発展法則に関する科学という以上のもではない」(Engels, 1975, pp. 168-169)。言いかえれば、弁証法的論理は、思考の法則とパターンに関する科学であるだけではなく、すべてのもの、すなわち物質的なモノと「精神的なもの」のいずれもの発展に関する科学に他ならない。

ヘーゲルは、彼の周囲の世界、人間の文化と労働にも関心をもった。しかし、彼はそれらを普遍的思考の派生物だと見なした。そのため彼は、永遠の普遍的精神から独立した自然と文化の形式を、それ自体として、別個に研究することを不可能にした。そうであるとしても、ヘーゲルは決して弁証法をたんなる「対話的相互作用」あるいは対象的内容を欠いた「ディベートの連続性」に還元しはしなかった。ヘーゲルは、思考と外的・物質的世界とのあいだの関係を転倒させて見てしまったかもしれないが、世界を彼の視野から排除することがなかったのは明らかである。「思考は、内容を「自身とは」異質な、外のものとして扱う活動ではない。それは内容を離れた自己の反映でもない」(Hegel, 1966, p. 113)。

ヘーゲルは抽象的形式主義に痛烈な批判を浴びせた。

知る主観が、ただひとつの動かぬ形式をどこにも引き回して、彼が出会うどんな素材にも外から押し

つけるやり方をとるならば、望んだとおりにするのに同じで、すなわち、細部のすみずみまで自己発生し、姿形の違いを自己決定することであって、思いのままにファンタジーのはたらく余地がある。このような形式主義は単調な形式主義であって、素材の区別を立てているにすぎない。というのもそれはすでに留意され、よく知られているからである。(Hegel, 1966, p. 78)

形式主義との対比において、ヘーゲルは、弁証法の本来的な性質を規定した。

抽象的なものあるいは非現実的なものはその要素と内容ではない。現実的なものとは、それ自身として確立するものであり、それ自身のうちに生をもち、みずからの概念のうちに存在する。進行するなかでみずからの契機を削り出しそのすべてを経過していくものは過程である。そしてこの運動の全体が肯定的なものとその真理とを構成するのである。だからこの運動は否定的なもの、もしそれがそこから抽象を引き出さねばならないものと考えられるならば、偽と呼ばれるかもしれないものを含んでいる。

(Hegel, 1966, p. 105)

言いかえれば、弁証法は現実の具体的内容を扱うのである。さらに、弁証法は対象の運動を扱う。この運動は二つの本質的な特徴によって性格づけられる。ひとつは、運動が外的に引き起こされるのではなく、内的に生成される自己運動であるという点(自己原因)である。もうひとつは、内的な諸矛盾の形での運動であるという点である。弁証法的思考は、「内容のなかに沈み、浸透し、内容自身

の本性によって、つまり内容自身のものとしての自己によって、指示され統制されるにまかせ、この過程が生ずるがままに観察すべきである」(Hegel, 1966, p. 117)。

弁証法的思考の過程は、形式的理解の過程と比較される。

(形式的) 理解は、事柄に内在する内容に入りこんでいく代わりに、いつも全体を見渡しており、みずから語る個々の存在を超えたところにいる。つまり、個々の存在を全然見ない。(Hegel, 1966, p. 112)。

すでに知られていることへ還元してしまうのではなく、弁証法的思考の成果は、まるで情熱的な冒険、あるいは探偵物語であるかのごとくに現れる。

真の科学的知識は、逆に、対象のまさに生命を放棄すること、あるいは同じことだが、対象を支配している内的な必然性を前景に置き、それだけを言い表すことを求める。対象のなかに入り込むなら、この全体的な見渡しを忘れるが、この見渡しとは、知識が内容の外に出てみずからに帰ることであるにすぎない。素材のなかに身を沈め、その素材の運動に沿って進むことによって、真の知識がそれ自体に帰ってくる。とは言ってもそれは、内容がその全体を自己のなかにとりもどし、しっかりとした性格をもつものとして単純化され、実在する統一体のひとつの側面にまでレベルを落として、より高い真理に移行してからである。この過程によって、自己を見渡す全体そのものが、この豊かな産物のなから浮び出てくるのであり、そこでは、内省の過程は失われたかに見える。(Hegel, 1966, pp. 112-113)

この過程は、内容と形式、理論と方法を統合する。

内容の具体的な形態は、それに内在的な過程によって、単一で明確な質となる。こうして具体的な形態は論理的形式に高まり、その存在と本質が一致する。その形態の具体的な存在はこの過程に他ならず、それがそのまま論理的な存在なのである。だから、具体的な内容に形式的図式を外からつけ加える必要はない。内容は、その本性において形式的図式に移行するのであり、この図式は外的な形式的図式であることを止める。というのも、形式は具体的内容自身に固有の過程だからである。(Hegel, 1966, p. 115)

ヘーゲルによれば、真実は全体的なものである。「だが全体とは、みずからの展開の過程を通じて、みずからを完成する基本的性質のことに他ならない」(Hegel, 1966, p. 81)。全体は、「最初に現れるときは直接的で、ただ概念であるにすぎない。基礎がすえられたときに、建物ができあがっているわけではないのと同じで、全体という概念に行きついたからといって、それは全体そのものではない」(Hegel, 1966, p. 75)。理論的思考は、複合的な全体の最初にある真に一般的な本質を発見し、全体をその抽象的な基礎へと還元しなければならぬ。

だが、この抽象的な全体が実際に実現されるのは、これらの契機となった形態形式が、いまや全体の理念的契機へと還元されているのだが、再び新たに、しかも新たな場において、新たに獲得した意味のなかで、展開されてのみである。(Hegel, 1966, p. 76)

弁証法的方法は、対象の發展、すなわちその歴史的な「生成」(becoming)の論理を理論的に再生産することによって、対象の本質を把握する方法である。弁証法的方法は、それゆえ歴史的方法なのである。しかしそれはまた、歴史的なものと論理的なものの統一でもある。対象の歴史は、恣意的な細部が純化されて論理系列のレベルへと高められ、細部は、その完全な豊かさにおいて再び引き出され、「そうして獲得した意味」をえるだろう。

この方法を抽象から具体への上向と呼んでいる。それは近道ではない。それぞれの対象に関して、「素材のなかに沈むこと」によって、發展の論理はそのつど新たに発見されなければならない。

私は拡張的移行に関する第三の道具を求めている。ヘーゲルと彼を信奉する多くの唯物論者による弁証法は、二つの点で問題がある。第一に、思考の方法としての弁証法は、一般に孤独な努力とされている。第二に、弁証法は一般に、思考だけの方法とされている。

私の分析では、弁証法は拡張の論理である。そして、拡張は本質的に、物質的な実践を再構築する人々の集団がかかわる社会的・実践的な過程なのである。

11 社会性と拡張——徒弟制からポリフォニーへ

ヘーゲルは、思考が個人を超えたものであることに気づいていた。前述のように、実際にある共通の仕事に参加するとき、彼らにそのような意識がないとしても、みずからを普遍的思考の法則や形式

に従わせていく。ヘーゲルにとって、個人を超える思考というものは、生身の人間によつては十分に現実化されえないものだった。絶対精神こそが個人を超える思考の主体として位置づけられねばならなかった。

ヘーゲルは、前資本主義的な社会構造の終焉に立ち会っていた。この社会構造は、意識的内省をともなわない集団主義で特徴づけられる。その好例は、徒弟制 (apprenticeship) という中世のシステムである。それらはいまも生き続けており、研究されている。たとえば、日本の伝統的な芸能である。

日本の伝統芸能は、(…) 科学的に教えられることは不可能で、弟子たちは師匠の振るまいを繰り返し真似ることによつてのみ習得できると見なされてきた。こうした学びのやり方を「芸を盗む」と呼ぶことがある。たとえば、日本舞踊の入門者が最初にすることは、まさに師匠の踊りの形を真似ることなのである。長年それを繰り返し、ついに日本舞踊に熟練し、師匠と呼ばれるようになる(…)。(Hiroma, *Isu*, 1986, pp. 1-2)

芸は、「界」(world) と呼ばれる特殊な社会的形成体において実践される。相換は、そのよい例である。

相換界においては、確立した住み込みシステム(部屋システム)があり、すべての力士は必ずいずれかの部屋に入り、師匠や他の力士たちと一緒に暮らさなければならぬ。この住み込みシステムの目的

は、若い力士を幕内になれるよう訓練することにある。あわせて、彼らには、相撲界を独立した社会として存立させるための厳格な礼儀作法、規律、特殊な価値が教え込まれる。物理的に、住み込み施設（部屋、つまり字義通りにはルーム）は、生活と訓練のすべての施設を備えた、独立の単位なのである。（…）

住み込み施設は、ひとりのボス（親方）による絶対的な統制のもとで運営されている。親方はすべて、かつて幕内力士だった人であり、日本相撲協会の構成員である。親方はふつう既婚であり、特別な区画に妻と暮らしている。親方の妻は、「おかみさん」と呼ばれ、部屋に住む唯一の女性である。おかみさんは、住み込み施設の円滑な経営にとって重要な舞台裏の役割を果たす。ただ、力士のための食事や洗濯といったことは仕事に含まれていない。親方の住居区画以外では、こうした家事のすべてが見習いや下位の力士によって行われる。彼らは、それらすべての苦役に対する報酬を一切受けない。さらに、彼らは上位の力士に付き人（使用人）として仕えなければならない。（…）親方や他の力士たちと部屋に暮らすことは、若い力士にとって、相撲をとることの実践であるだけでなく、相撲界の全体的な状況を学ぶことでもある。（Hiromatsu, 1986, pp. 11-13）

ヒロマツ（Hiromatsu, 1986, p. 15）は、伝統芸能は、「点」ではなく全体としての「空間」の観点から考察されねばならない、と結論している。これは明らかに正しい。しかし空間の次元は、ここでは時間の次元と分かちがたく結合している。暗黙の伝統というかたちでの歴史は、「界」の内部のすべての行為に現れる。そして、親方は本質的に、伝統の代表者あるいは体現者なのである（同業組合

と徒弟制に関する分析・記録として、Goody, 1982; Sturmer, 1979 を参照)。

産業資本主義とは、個人主義の勝利である。そこでの成熟した学習形式が、義務教育である。義務教育学校において支配的な機能単位は、個人的で空間的にも時間的にも分離した課題である。

基本的なパターンはこうである。学習は、(1) 個々別々の初歩的な課題（小樽を穴に入れなさい、猫はどこか、dogと綴りなさい、2たす2はいくらか）のような形で始まる。(2) 課題は、特殊なエピソードとして出来事の流れから分離され、始まりと終わり、そして「これは特殊な状況である」ということを示す何らかのマーカーをもつ。(3) 第二の学習パターンが子ども知覚・運動的能力と認知的能力のなかにほどよくつくられる年月のあいだ、課題が慎重に調整される。(4) 課題は解決の時点で終了する。(5) 解決の時点で、二項対立的な結果、つまり「成功」か「失敗」かに分かれるように構成される（つまり、解決の時点は、「解答」が与えられる時点に等しい）。(6) 課題はすべて「成功した解答」をもたなければならぬ。(7) そうした解答は、短時間（注意の及ぶ幅、あるいは逆くとも子どもの「動機の幅」のうちになされる）。(8) 「解答」には報酬がある（「失敗」には報酬が与えられず、罰と受け取られる）。報酬は、「トライすること」への二次的でちよっとした報酬とは明確に区別される。(9) 学習パターンを確立する段階での通常の報酬は、優しさや親愛の情を増すことである。(10) この報酬は、子どもにとって情動的に重要な人から与えられる。(Levy, 1976, pp. 179-180)

レヴィ (Levy, 1976, p. 183) は、「課題の内容は、マーカーとしてのよさに関係することを除けば、

重要でない」と指摘する。このタイプの学習は、狭い専門化（「区画化」と呼ばれる）と、人生への御都合主義的アプローチの優勢と密接に関連している。学習でも賃金労働でも、前者は社会性（sociality）の空間的次元を表し、後者はその時間的次元を表している。

マルクスは、普遍的労働に関する有名な短い一節で、社会性のこうした二つの側面をとりあげている。

ついでに言えば、普遍的労働と協働的労働とは区別されなければならない。どちらも生産過程でそれぞれの役割を果たし、互いに入りまじってはいるが、しかし両者のあいだには区別がある。普遍的労働というのはすべての科学的労働、すべての発見、すべての発明である。それは、一部は、生きている人々との協働を条件とし、一部は、過去の人々の労働の条件を利用している。協働的労働は、諸個人の直接的協働である。（Marx, 1971, p. 104）

協働的労働、諸個人の直接的協働は、社会性の空間的次元である。しかし、真の普遍的労働は、常に、時間的次元、つまり過去と未来の人々との間接的な「協働」をも前提にする。

先ほど私は、徒弟制と学校教育におけるこうした諸次元の概略を述べた。では、拡張による学習に見合う社会性はどのようなものとなるのだろうか。

答えに向かう上でもっとも有望な要素は、ソビエトの文学理論家ミハイル・バフチンによってなされた小説の性格に関する研究（Bakhtin, 1973; 1981）のなかに見つけられるだろう。

マイケル・ホルクウィストは、「一九世紀に小説が大成功したおかげで、歴史の大部分において小説が周縁的なジャンルであり、ほとんど研究されず、たびたび非難されたという事実がわかりにくいものになった」(Holquist, 1981, p. xxvii)と記している。パフチンは、小説を叙事詩と比較する。彼によれば、「叙事詩の世界は、英雄たちにとっても作者にとっても聴き手にとっても不可避的であり疑いのない、単一唯一の、完全に出来合いの世界観だけを知っている」(Bakhtin, 1981, p. 35)。さらに、「叙事詩的悲劇的英雄は、自分の運命の外では、何者でもない。それゆえ彼は、彼に割り当てられた筋書きとしての運命に従うだけである。彼は他の運命、他の筋書きのヒーローにはなりえない」(Bakhtin, 1981, p. 36)。

文学的意識の支配的形式としての叙事詩と学習の支配的形式としての徒弟制とのあいだには、深い類似性がある。徒弟制の「世界」は、叙事詩の「運命」や「筋書き」と呼応する。産業資本主義と義務教育が徒弟制にとって代わったように、小説が叙事詩にとって代わる。

叙事詩的距離が破壊され、個人のイメージがはるかな昔の地平から現在の未完の出来事(したがって未来のそれ)と接触する領域に移ると、小説における(そして結果として全文学における)個人のイメージをすっかりつくりかえることになった。この過程で、小説の民話的、大衆的な笑いの源泉が非常に大きな役割を果たした。最初の、きわめて本質的なステップは、人間のイメージが滑稽で親しみやすいものとなったことである。笑いは叙事詩的距離を破壊した。笑いは自由に無遠慮に人間を探究し始めた——人間を裏返しにし、外側と内部、可能性とその現実のあいだの不一致を暴き始めた。人間のイ